

“いまだ語られざる”
アジア・世界の中の日本近現代のあゆみ

シリーズ 日本の開発協力史を 問いなおす

全7巻

戦後日本の歴史、知、国際実践を
開発協力から照らしたす初めての読み

- 第1巻 日本型開発協力の形成
- 第2巻 最大のトナーの登場とその後
- 第3巻 開発協力の思想史
- 第4巻 国際教育協力の承譜
- 第5巻 インフラ協力の歩み
- 第6巻 開発協力のオーラル・ヒストリー
- 第7巻 開発協力のつくられ方

東京大学出版会

発刊によせて

日本は1955年10月6日、コロンボ・プランへの参加を決定し、1955年から研修員の受け入れ、専門家派遣など、政府ベースの技術協力を開始した。これが日本の政府開発援助（ODA）の始まりであり、今でも10月6日は国際協力の日とされている。

その頃の日本は、壊滅的な敗戦から9年、サンフランシスコ講和条約の締結（1951年）と発効（1952年）によって独立を回復したばかりだった。ODAといえは、通常、先進国から途上国に対して行われるものであるが、日本は1964年に経済協力開発機構（OECD）への加盟を認められ、先進国の一員として認められるよりも10年も前から援助を開始したのであった。それは、いったい何故だったのだろうか。

その後、日本のODAは1990年代、金額において、ほぼ世界一となった。しかし、日本の援助のあり方については、他の先進諸国から批判が絶えなかった。東南アジア等の東アジア地域を中心として、より貧しいアフリカへの援助が相対的に少なかったこと、有償借款が多かったこと、紐付き（tied）援助が多かったこと、などである。

これらのうち、アフリカ等への援助は増えなし、tiedは修正されたが、その他の点は変わらなかった。

しかし、「樹は実によりて知られる」（マタイによる福音書）という、日本が協力を深めた国々は発展した。これは紛れもない事実である。日本の国際協力には、日本自身が非西洋から発展した最初の国家であったという歴史と、敗戦から立ち上がった歴史が、刻み込まれている。

日本のODAは2000年頃から金額的には減少し、一般会社ベースでトナーの半分、支出総額の順位で言えば、世界の第4位程度である。伝統的なドモ、民間資金の比重が増えている。さらに、公的資金よりも、民間資金の比重が増えている。

このような状況で、戦後の日本の国際協力の歴史を振り返り直すことは極めて意義の大きいことと考える。

さらに、2019年末から世界に広がった新型コロナウイルスの感染は、世界の構想、秩序を変えてしまうような歴史的な出来事である。自国第一主義や権威主義が広がる中で、世界の持続的な発展のためには、国際協力は今まで以上に重要であり、ODAを通じて日本の国際協力が主導的な役割を果たすべきである。

北岡伸一
国際協力機構 理事長、東京大学名誉教授

シリーズ 日本の開発協力史を問いなおす

全7巻

A5判・横装、上製・240×320頁
各巻定価（本体）3,000～5,000円＋税（守備）

- ▶ 国際開発協力を、第二次世界大戦後の日本における「国際関係構築」の最少ない積極的手段と位置付け、その実態を多角的視点から明らかにする
- ▶ 対象となった国や人々の声を聞くとはどのようなことか、日本側の政治的過剰、思想の移り変わりとはどのようなものか、国際協力を歴史的に評価する視座を考える
- ▶ 途上国という他者に向けられてきた近代日本の顔、語られてこなかった目らの近代史に出会う本格的筆者によって構成されるシリーズ
- ▶ ICA協力研究所（国際協力機構 協力員女子平和開発研究所）の研究プロジェクトとして、線の研究者が参画した成果

目次

※もよりの書部へお申し込みください

- 全7巻申し込みます (セト)
- ① 日本型開発協力の形成 (冊)
- ② 最大のトナーの登場とその後 (冊)
- ③ 開発協力の思想史 (冊)
- ④ 国際教育協力の承譜 (冊)
- ⑤ インフラ協力の歩み (冊)
- ⑥ 開発協力のオーラル・ヒストリー (冊)
- ⑦ 開発協力のつくられ方 (冊)

【著者のご住所、ご芳名】

【電話番号】

東京大学出版会 〒153-0041 東京都目黒区三軒が辻4-2-9 TEL 03-6402-1088 FAX 03-6402-1891 <http://www.tu-pub.jp/>

第1巻 日本型開発協力の形成

——政策史①・1980年代まで

日本を取り巻く国際環境は時代と共に大きく変容したが、それに対応して日本がどのような道路選択の政策決定を行ない、その中で開発協力はどのような役割を担ったのか、政府開発援助（ODA）のみならず民間部門の活動を含めた途上国への協力全体を、一次資料を活用し、時代の文脈に留意しつつ、一貫した枠組みで分析する歴史の1巻。その「日本的」な性格とその背景を洗い出し、戦後日本の国際経緯を再構築する。

はじめに——原田雄一の巨匠まで、なぜ開発協力ができたのか

序 章 開発協力政策の歴史を再考える契機

第1部 被援助国から援助国へ

第1章 戦後からの戦後と開発協力の黎明——戦後復興援助とコロンボ・プラン（1948年まで、1945-1954年）

第2章 援助国への進——高橋蔵長の祖徳からOECD加盟まで（1955-1964年）

第2部 援助国への道

第3章 国際環境の改善とODAの急進と拡大（1965-1979年）

第4章 東南アジアの「反日」と開発協力の改善

第5章 日本経済増強の情勢と開発協力政策の改善

第3部 「21世紀的なドナー」を求めて

第6章 「もう一つのアフリカ—オ」の形成

終 章 戦後から戦前へ——なぜもう一つのアフリカ—オなのか

第2巻 最大のドナーの登場とその後

——政策史②・1990年代以降

戦後の黎明期から星の拡大を新た第1巻に続き、1990年代以降から現代へ流れを辿り過去の下落、「トップドナー—日本」の開発協力は、独自の知的資産を活用して行われた、当時支配的な開発協力潮流への挑戦の過程でもあった。その後、経済停滞による量的地位喪失の中で、日本の「もう一つのアフリカ—オ」はどのような変容を遂げていったか、「良きドナー」と「同盟」の中で、日本の開発協力の今後の可能性を再考える条件を構築する。

はじめに——「21」の時代の物語

序 章 本邦の動いと分極化

第1部 トップドナーとしての「国際貢献—努力

第1章 国際貢献—意識の移り変わり（ODA）の導入

第2章 民主化支援への政策対応

第3章 「国際貢献協力」と「官民連携」——赤井和夫とその意味

第4章 「真の主体化」への対峙

第5章 アフリカへの取り組み——TICADの軌跡を中心に

第6章 地球環境問題への対応——なぜ環境協力を再興したのか

第7章 市民参加の推進への対峙

第2部 トップドナーとしての対外発信——東アジアの躍動に基づいた経路の読み

第9章 経路の読みかた——東アジアの躍動、「南アジア」の動向

第10章 中国の改善と日本との開発協力を何をもたらしたのか

第11章 最大のドナーとしての中国

第12章 新格差援助国へのシフト——「良きドナー」のふたまたま、「狭い同盟」の復活

第13章 援助協力の再興——「もう一つのオ」あるいは「もう一つのドナー」へのポスト

第14章 援助協力の再興——「もう一つのオ」の再評価

終 章 「ポスト援助」の時代の道——道徳を求めて

第3巻 開発協力の思想史

——帝国の形成から21世紀まで

……高橋基樹（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究科教授）

日本おとが日本人は、開港後上国（地味）の「他者」と向き合い、支援することを中心とするようになってきたのか、植民地の上国地を合ら歴史的関係において、思想史・研究史がけでなく政策とその変遷の「道」と「思想」が持つ変遷と潮流の通史、研究史と実践者との前後関係の共同という異なる種の「知的共同体」といふ出合った智識的集団、アジアさらにはアフリカへの共鳴、そして「国益」とのシフト……。開発協力というラネンスを通じて、日本近代の歴史を振り返る。

序 章 開発協力の思想史——近代日本における国家主義と帝国主義

第1部 日本の開発協力思想史——思想と経緯

第1章 近代日本における国際貢献思想と植民政策

第2章 若い帝国の時代——世界史とアジア

第3章 敗戦後社会における国際協力の思想

第2部 開発協力の形成—期間と学術型—花岡知

第4章 開発協力の開拓と日本史（1945年—1960年）

第5章 開発協力の日本—多面化と「途上国」へのまなざし（—1970年代）

第6章 拡大期日本の日本—開発協力の思想の分裂（—1980年代）

第3部 開発協力の成熟と思想

第7章 「歴史の終わり」以後の日本の開発協力とその思想（—1980年代）

第8章 成熟期の世界と開発協力上思想（—2000年代）

第9章 変動する世界と開発協力——原理の進化と今後の展望（—2010年代）

終 章 開発協力をめぐる理論主義と現実主義の相対と対話——その軌跡と展望

第4巻 国際教育協力の系譜

——越境する理念、政策、実践

……黒田一雄（京都大学大学院アジア太平洋研究科教授）

近代という時代は、「国民教育」の時代でもあった。日本の近代教育史もその成功であれ反省であれ、かつては帝国の境界、戦後は日本国の国境の内外の空間で語られてきた。しかし前巻を含めればほぼ近代日本の全時間軸を共有する「国際教育協力」は、周辺的のセンソードに過ぎないのだから、日本が当事者となる国際関係の中で、語られた理念と価値観、行われてきた実践を位置づけ直し、「もう一つの近代日本の教育経緯」を明らかにする。

序 章 国際教育協力とは何か

第1部 国際教育協力の理念的視角——なぜ国際教育協力をを行うのか

第1章 国際社会の求められる価値観からのアプローチ

第2章 国際関係——比較国際教育からのアプローチ

第2部 日本—国際教育協力の史的展開

第3章 国際教育協力の前史——明治維新—大正—昭和前期

第4章 国際教育協力の黎明——第二次世界大戦後から1960年代まで

第5章 「人づくり」のための国際教育協力——1970年代から80年代まで

第6章 教育のグローバル化とナショナル形成と日本——1990年代から2000年代まで

終 章 日本—国際教育協力政策—実践の理念的展望——未来に向けて

第5巻 インフラ協力の歩み

——自助努力支援というメッセージ

……山田順一（国際協力の戦略研究科教授）

日本の開発協力は、アジアへのインフラの輸出と整備を中心に据えたものであった。負の影響である環境問題、住民移転などの社会的問題にも向き合いつつ、それぞれのプロジェクトは何を担い、諸外国の援助に比べてどのような特徴があったのか、戦後前編と東南アジア、輸出前編と南アジア、中国への「国づくり」の支援と、土本的な成果ばかりが目立まれるインフラ開発に込められた「自助努力支援」の思想に、その契機からアプローチする。

はじめに

第1巻 インフラ協力の歩み——東アジアから南アジアまで

第2巻 インフラ協力の理念的視角——ODAは本当に貢献したのか

第3巻 インフラ協力の歩み——日本は東洋の東人だったのか

第4巻 シンガポール——ビルド、運の運は再興したのか

第5巻 フリレン——民間時代からの安全確保へ

第6巻 ベトナム——インフラが伸びた

第7巻 タイ——ODAのガバナンスはなぜ必要か

第8巻 中国——ODAのガバナンスはなぜ必要か

第9巻 インド——インフラ協力の歩み

第10章 インフラ事業を成功に導くもの——日本ならではの差別化へ

第6巻 開発協力のオーラル・ヒストリー

——危機を越えて

……峯 岡一（同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科教授）

開発協力を歴史的に評価するとき、対象の話を聞くことは最も重要なことであるが、人々の多様性、時間による変化は、それを最も難しい課題にもしている。本書は、アジア、アフリカ、ラテンアメリカのプロセスに現場で関わった人びとを訪ね、オーラル・ヒストリー（口述史）の方法で、援助する側とされる側の両方に皆に敬意を払い、開発プロジェクトが命を吹き込まれて動き出す現場の、生きられたリアルに迫ろうとするものである。

第1章 声を記録する——開発協力の口述史

第2章 水の恵み、人の恵み——農業協力の現場

第3章 モノづくり、人づくり——製造業の現場

第4章 学校は誰のものか——教育の現場

第5章 健康への権利——保健医療の現場

第6章 人間の安全問題に向けて

第7巻 開発協力のつくられ方

——自立と依存の生態史

……佐藤 仁（東京大学東洋文化研究科教授）

日本は相手国の「自助努力」を援助するという。しかし、「自立」「自力更生」という発想を植民地であった国々から考えようが見えるか、協力の結果、借款や技術をした先進諸国への依存を深めた事例例に「自立」として依存が立った事例（など、自立と依存の生態史が現れてくる。開発協力を当事者の「意図」でなく「まきまき」で捉えていた圧力環境」に注目する本書は、「国の経緯」を基で初めて見えてくる変化を多様な当事者の視点を通じてすることから解き明かし、従来「援助言説」をまっなく新しく再編する。

序 章 開発協力を引き出す力

第1部 自助努力と開発協力

第1巻 自立の歩み——戦後日本東洋のアジアに開く山と力

第2巻 開発の東洋アジア——援助の受入れと体制どうつくられたのか

第3巻 途地の現場——援助的国策を定める条件は何か

第2部 経済協力から開発援助へ——1960-1980年前後

第4巻 後援援助国への圧力——日本はなぜ「援助国連」になれたのか

第5巻 組織主義的援助の援助効果——援助的東洋アジア管理国家によって何だったのか

第6巻 輸出するODA世界——国際案件 はなぜある時期に集中したのか

第3部 開発援助から開発協力へ——1990年代から現在

第7巻 開発協力和「人間」の発見——日本のODAは誰をどのよに育てたか

第8巻 劣り続ける援助的現場——民間企業—は援助企業—を置き去るか

第9巻 民間援助のその後——民間は地域の自立につながったのか

終 章 開発協力を促す力